

資料

マックス・ウェーバー

『東エルベ農業労働者の状態における発展諸傾向』(一)

大 藪 輝 雄

(共訳)

吉 矢 友 彦

凡 例

- 一 本文は Max Weber: *Entwicklungstendenzen in der Lage der ostelbischen Landarbeiter*, 1894. の邦訳である。原文は Archiv f. Soziale Gesetzgebung Bd. 7, 1894. に発表されたが、訳の底本としては、『社会経済史論文集』に収められているものを使用した (Gesammelte Aufsätze zur Sozialund Wirtschaftsgeschichte, 1924, SS. 470—507)。
- 一 原文の ∇ / ∆ は 「」 とし、ゲシュェムルトの部分は傍点で示した。また若干のテクニカル・タームにはルビを付した。また原注はその直後に訳出した。
- 一 掲載の都合により、今回は全体のほぼ半分、すなわち四七〇〜四九〇頁 (一四行目) までを訳出した。

「社会政策学会」は、その成果が一年半以来三巻の大冊となつてゐるところの農業労働者の状態に関する調査を行つてきた。そこに収められた報告は、土地所有者に照会すること

によつて入手されており、(その後福音社会々議が地方司祭の手を借りて行なつたように) 労働者に質問することは、当時は費用の点から取り止められねばならなかつた。それゆゑ

マックス・ウェーバー『東エルベ農業労働者の状態における発展諸傾向』(一) (大藪・吉矢) 八九 (三九五)

に、アンケートが明らかにした事実に関する膨大な資料はたしかに一面的なものであつて、農業労働者のじつさいの状態にたいしてまったく異論の余地のない結論をゆるすものではない。しかしながら一八四九年と一八七三年に同じ方法による調査が行なわれているので、社会政策的により重要なこと、つまり、それ自身にすべて同じ誤りの蓋然性をもっているところの三つの調査結果を比較することによって、農業労働者の状態における発展の諸傾向に関する情報を入手するということが可能である。最も重要な問題は、こん、ち、の、労働者が暮せるだけの賃金や良好な住居を手に入れているかどうかということではなくて、国民内部におけるかれらの地位の總体的発展はどこへ向っているのか、またかれらの未来は何であるのかということである。

この刊行物は、この問題を判断するためにはたしかに最終的なものではないにせよ、それにもかかわらず高度に蓋然性をもつ結論をゆるすところのひとつの基礎を、われわれに提供する。それはわれわれにつきのことを、すなわち、物体の分子層における転位作用と同様に、その作用が緩慢にしかも統計の大きな数字になれた眼にはほとんど気づかれずに実現

されるために、なおいっそう防ぎようもなく入り込んでくるところの、東部の大地主農場経営の社会的構造、その労働制度内部での一定の根本的变化を示している。——しかし、われわれにとってここで問題であるところの労働制度の変容ならびにその作用は、孤立的には観察することができない。それは一般に東部における農業の運命、とくにそこでの農業大経営の運命と関係がある。ところで、東部に特徴的なこれらの大経営を、その自然的諸条件の著しい相違を考慮に入れないで基本的に同質の集団とみなしたり、まったく普遍的に「窮境」が存在すると主張したり、あるいは同様にそれを一般的に否定したり、またはそれが事実であると認められる限りでも、資本の欠乏や指導者の知力の不足から理由づけることは、たしかにまったく根拠のないことである。だがそれにもかかわらず現状の意義にとって決定的な一契機が、すべてについて同様にあてはまる。東エルベの大地主農場はけつして単なる経済単位ではなくて、地方的な政治的支配の中心地である。それはフロイセンの伝統にしたがつて、国家がその政治的支配の執行、国家権力の軍事的ならびに政治的全権の代理をその手にゆだねるのをつねとしたところの一人口層が存在す

るための物質的支柱をなすべく定められていた。土地貴族ランドグレイズの成員が、プロイセンの伝統がそれをよく心得ており、またその歴史にしたがって心得ざるをえなかったような国家利益の見地からこの信任厚い地位につく資格があったのは、かれらが比較的におくれた営利衝動とそれに相応した平均以下の経済的知力を持ち、それゆえふつうかれらの権勢を純粹に營業的に利用しつくす傾向はなく、いずれにせよそれをあてにしないところの「充ち足りた存在」だったからである。経済的・社会的にはおかれているが、政治的にはもつとも重要な国家の東半分の支配は、この身分に支えられて、安上りでしかも腐敗のおそれなしに遂行することができた。一言でいえば、東部の地主農場屋敷は政治的支配階級の農村への分屯を意味した。それは郡役所所在地や県庁所在地でさえ、駐屯軍や官吏階級が、快適な社交をみいだす基地として、いまなお都市の大ブルジョア階級による政治的知力の独り占めにたいする非常に効果的な——事実上決定的な——対抗物をなしている。

しかしながらこの地位とともにその生活基準にたいする一定の要求、すなわち子供達の教育、社交の形式およびその他の多くのものにたいする要求が、おのずからあたえられている。それらはとくに、たいいてい的大量生産物の値段はたえず下落するの、われわれの生活はたえずより高くつくようになるという特有の現象をひきおこす。地主農場所有者はその生活基準において都市の「上流」ブルジョア階級が平均して占めているところの段階に立たなければならぬ、さもなければかれは農民なみになってしまう。——ところで五十年このかた都市ブルジョア人口の生活基準と生活要求とはたえず顯著に向上しており、まさしく大ブルジョア階級、すなわち政治的覇権ヘゲモニーをめぐる農村貴族階級のこれまでの主要な敵手のそれがもつとも著しい。この生活基準と歩調をあわせようとする、今日の社会状態の下ではとうぜんでしかも避けがたい努力は、東部の土地貴族階級の多数にとつては、外国の競争の影響がいつさいなくても、かれらの経済的基礎を危うくするにちがいないところのひとつの宿命をなしている。こんにちプロイセンの騎士農場所有者が「支配階級」の一構成員の生活水準を——いっさいの浪費を除外して——維持しようとするならば、持ち出すにちがいない生活基準にたいする要求には、明らかに「巨大土地所有ラタイフンディウム」ではないところの東部の典型的な騎士農場は、まったく感じることができない。東部に

おける全騎士農場の三分の一以上が所有しているにすぎないような東部の平均的土壤における約五百ヘクタールの地積（また平均以下の土壤のばあいにはなおかなり広い地積）は、収穫が増加しているにもかかわらず、もはやここでは「覇権」を支えることはできない。なぜなら収穫の上昇は概して、支配階級の平均的、生活基準の上昇よりもとくに甚だしく緩慢なものであり、そしてこの相対的尺度が決定的なのであるから。このことはしばしば誤解されている、というのは地主農場の家計に必要なものはほんらい現物経済的にまかなわれるべきであるので、その家計の著しい負担にはけっしてならないかのように思われているからである。しかしながらそこには見まちがある。それは現代的生活態度はたえず増大する現金支出を必要とするからである。その内部でかれがその役割を演じなければならぬところの社会全体の変化は、ある地積を自由にできるが、その地積は他方では現実の自己経営一般をしめ出すほどには大きくないところの騎士農場所有者を圧迫する。政治的権力は、たしかな物質的基礎を頼りにすることができないで、いまや逆にその経済的利益に奉仕しなければならなくなる。それゆえに、保護への熱望がすでにやや

もすれば不満をもった被救恤窮民の語調をおびているのは、とうぜんでさえある。農村においては、経済的に「充ち足りた存在」に代って「窮境にある農業者」というご存知のタイプがわれわれを迎えることになる。それは——ある程度は——いっさいの国際的競争がないとしてもそうであろう。政治的権勢がこの基礎の上に引き続いて維持されえないのは明白である。政治的・社会的順位のうえでの著しい相対的下降は、工業的發展の進行がまったく妨げられないかぎりには、どうしても避けられない結果である。

しかしながらその政治的権勢を維持しようとする努力にさいて、たんに土地の収益が騎士農場所有者を見捨てるだけでなく、それをかれが支配し、よりどころにしたところの社会的グループさえもがかれを見捨てる。われわれがかつてそれを調整（レギュレーション）整から受け継いだ大地主農場の組織は、まだそれ自体に孤立した家計という卵の殻をつけていた。その経済から持ち出される生産物部分は、たしかに中世におけるよりも概して大きいものになっていた。しかしながら世界経済への編入の開始は、意識的・計画的には実施されなかったであろうし、また実施されることはできなかった。それは一部分はな

かば不承不承に諸事情によって経営に押しつけられ、一部分は経営によってたえず無視された。典型的な騎士農場所有者はまるでかれが地方市場向けに生産しているかのように、伝統的なやり方で経営しつづけた。古い労働制度と社会的階層は東部のインスタ関係や地主農場日雇人関係のなかに存続した。農業労働者は、主人の支配に服する代償として土地をあたえられ、仲間として経営収益の分配にあずかる小農業者であったしまたそうでありつづけた。この世紀のあいだに初めて言うに足るほどの貨幣資金の供与が土地分け前や収益分け前と並んで侵入し、ついには一部分それにとつてかわつた。その後もなおグーツウィルトンシャフトは主として家父長的に指導され、支配された協同経営、営の一形態であった。グーツヘルは通例の雇い主ではなくて、労働者を人格的に支配した政治的専制者であつたが、その他の点では直接的な物質的利益のきわめて重要な部分をかれらと共有していた。そしてこのことは近代的企業家にあつてはその労働者との関係でふつうけつてそうではないのである。凶作と穀物や家畜の価格の下落は土地分け前や粗収益分け前に頼り、穀物や自分で飼育した豚を販売するインスタマンの家計に、主人のそれと

同様な重さの・またはより重い負担をかける。この事態が労働者をそれだけいっそう無制限に主人の意のままにさせたことは明白である。しかしグーツヘルの権勢の土台にとつてより重要であるのは、農業労働者——すなわち実際には東部におけるその何にもまして重要な層である「インスタロイテ」——を工業プロレタリアートからするどく区別したところの、あの強力な物質的利益の絆であつた。主人に向けられた農業プロレタリアートの階級意識は、強烈な政治的興奮の時期を除けば、その主人がむきだしの残忍さと慈悲深さとが標準並みに入り混つたものより劣つていた限りで、ひとりひとりの主人に向つて純粹に個人的に發揮できたにすぎない。反面それは、ふつう農業労働者が純粹に營業的な搾取の圧迫にさらされていなかつたということに照応していた。かれらに向かいあつていたのは、まさしくひとりの「企業家」ではなくて小型の領邦君主であつた。独特の營業的な營利心が主人に不足していることと労働者の無感覺な忍従とがたがいには補ない合つていたのであつて、それらのものが土地貴族階級の伝統的經營様式と伝統的な政治的支配者の地位の心理的支柱であつたのである。

しかし、この政治的権勢の衰微は、一部ではすでに始められ、一部ではさし迫っているところの、より資本力あるブルジョア階級による横領——地主農場の購買のかたちである、賃貸しのかたちであれ——と結びついて、農業大経営の主人たちを、かれらがそれにとどまろうとするならばかつては——少なくとも第一義的には——そうでなかったもの、すなわち純粋に營業的な観点で経営するところの企業家になる方向へと、力づくで導くのである。こうしたことが起るか、あるいは大経営が完全な・または部分的な細分の道で小経営へと崩壊するか、そのいずれかである。さきのばあいには、「土地が移動する」のはなるほど主張されるように「最良の者へ向って」ではけっしてないが、しかしたぶんもっとも資本力のある者へと移動する。そしてこの後者は、土地貴族階級にとっては二の次であったもの、つまり營業的利益を第一位に据えようとしなないならば、みずからの存在を否認しなければならぬであろう。しかしそれによって孤立的なグーツウィルトシャフトに最後の一撃が加えられるのである。

グーツウィルトシャフトの孤立性が取り除かれるとともに世界経済の生産諸条件にたいして相対的にははるかにつよく

服従する必要がある、この経営にうむをいわず近づいてくる。農場経営にたいするそのことの必然的結果は土地や気候の状況が有利であるか不利であるかによって相異なる。この二点で自然に非常にめぐまれた地積の一部分は、うたがいもなく大量の資本投下を行なった高度に集約的な経営として、その国際競争を受け入れることができる。より集約的な耕作をとり入れたこれらの経営はそれからは周知の一般法則にしたがって、とくに資本集約的になろうと努める。まさにそれゆえにそれらの経営はゼーリンクによって適切に指摘された傾向、すなわち集中的な資本投下のもとでひとつの中心から経営される地積が縮小する傾向をたどるのである。すでにそのことから、政治的支配関心の見地からすれば、地主農場所有者の権勢の弱体化が生ずる、すなわちその支配する地積はより小さくなる。それらはもちろん農民的大経営ではないけれども、ブルジョアの資本家的大経営になり、——甜菜栽培地方でみとめられるひとつの現象だが——上昇しつつある大農民経営といっしょになって、ブルジョアの工業的タイプを持った企業の一団に融合する。もうひとつの、しかももっとも地味にめぐまれない地積部分は世界経済的には無価値で

あって、大経営ではたゞ非常に粗放な畜産のための放牧地区として利用されるにすぎない。この兩者のあいだには中位の品質の多くの範疇の土地があらゆる等級で存在するが、それをより集約的な耕作へと移すためには、優良さが低下するにつれて資本投下を増大する必要がある。もしこれが行なわれないならば、その土地は世界市場の循環をつうじて、その市場向けの生産によって地代をうみだすことのできる資格からますますしめ出されるし、それと同時に、もしその土地が資本の貧弱な大経営で利用されつづけるならば、最悪の土地と同じ状態にされる。——すなわちその土地は耕圃作物を効果的に栽培することができなくなる。この部分があつとも広大な部分であろう。穀物関税は、その部分を減らして集約的に穀物を栽培することのできる地積を拡大し、甜菜栽培のこれまでの助成と馬鈴薯火酒醸造のなほ現存する助成とは、それらの釋耕作物をこの部分に栽培することを可能にして、これに反して、世界経済的観点から純粋の畜産または主として集約的な畜産や菜園耕作に割り当てられるべき部分は、東部としてはまったく取るに足りない。後者が小さいのは、地積の二―三パーセントだけが後者のために変化するのは、

に完全な消費の変革を前提としたからであり、また前者がそうであるのは、イギリスにおいて集約的畜産のために現存する氣候その他の前提条件が東部では東プロイセンの海岸地方やその他若干の比較的限られた地区を除いては存在もせず、近々あらわれもしないであろうからである。⁽¹⁾

(1) 優良な土地において純粋の・またはほぼ純粋の畜産への移行が実現されたばあいの大部分は、その経営が資本集約的であるばあいさえ、経済的要因ではなくて、労働力の不足がその原因である。

——ところで、国際的生産区分の要請に服して、大経営が資本と労働を節約して放牧経営に移行するばあいには、なるほどその地積は領主の支配からは脱落しないけれども——反対にこれはつよい拡大傾向を示している——しかしおそらくそれらの大経営は労働力の最小限を保持しさえすればよく、企業家の数も巨大土地所有形成の道で減少するから、それらが支配していた隷農をうしなうであろう。それゆえにこどもこの身分は、その政治的権勢をうしなうことになる。

しかしわれわれはいたるところでその事情の結果としてひとつの共通の現象をみいだす。すなわち小経営への分割や

放牧地区としての荒廃が結局は起らないであらうところでは、東部の伝統的な領主^{グレンヘル}が知らなかったような資本集約度の徹底的な増大の必然性と商人的見地での経営の必然性が存在する。いいかえれば、その社会的特徴が原理上工業企業家とちがわない農業企業家階級が——人間の交代を伴ってか伴わないで——必然的に土地貴族階級にとってかわるのである。

農業雇用者の一般類型におけるこの変化は、かれらにたいする労働者の地位にもっとも重要な反作用をおよぼす。典型的な諸特徴をすべて綿密に調べてみると、その労働制度の多様性と個々の労働者の状態の純粋に個別的な形態は、今もなお封建時代の地主農場制度におけると同様な家父長的グーツウィルトンシャフトの一随伴現象である。というのは、地主農場の労働制度は営業の見地にもとづいて、できるだけ高い企業者利得を求める努力の影響下に形成されてきたのではなく、歴史的にはグーツヘルに身分相応の生活を可能ならしめる目的で、発展させられてきたのであるから。それゆえにその労働制度は伝来の自然経済的ならびに協同経済的基礎からまさに最小限度のものを捨て去ったにすぎない。たがいに同質的な経済的利害をもった農業労働者階級は存在しなかったし、

それゆえ東部の大半にはまだ存在していない。——近代的発展はまずこの自然経済的な枠の中で賃金形成における経済性の原則をより決定的に貫徹させようとする。したがってさしあたりそれは協同経済的残滓（土地分け前、打穀分け前、放牧地分け前）を清算する。これらの収益分け前権は、分け前賃金を伴った協同経済的労働制度が、経済的な点では個々の地主農場経営の孤立を前提としているゆえに、ながいあいだにはかならず不可避的に廃止される。古い方法によって、機械・人造肥料・排水設備等々にたいする特別の投資なしに経営された地主農場の収益については、主人はかれの労働者とともに、この収益がかれらの労働の成果でありそれ以外の何物でもない、とほぼ主張することができた。いかなる資本投下によってもこの理由は消え失せる。すなわち、国民経済の中へと編み込まれた地主農場の収穫物はもはやたんに地主農場居住者の経済協同体の労働生産物ではない。そして他人労働の生産物を地主農場へ投資することにたいする報酬は、資本家の組織に照応して、収益から前以って支払われねばならない（かくされた・またはおおよげの）資本利子としてあらわれる。それとともに、分け前原則にもとづく賃金諸形態

は消滅する。しかもそれらが存続してきたのは、主として企業家の経営資本が不足し、それによってかれが貨幣賃金を支払えないことの結果であつたから、ますますそうである。しかし貨幣賃金こそは純營業的基礎にもとづく全經濟制度の永久不可欠の相關物であつて、とくにその作業成績に応じた貨幣出来、高賃金制度の形態で、農業経営にも押しつけられるのである。

この緩慢ではあるが不可避的な変化の意義を完全に理解するためには、われわれは東部における農業労働制度をきわだたせている特徴を、詳細に調べる必要がある。この特徴は、比較的大きな地主農場のどの労働制度のばあいでも、それが農業経営における労働組織のもつとも重要な問題を解決しようとする仕方にもとづいている。この問題は、あらゆる種類の農業のばあいに——純粹の畜産のばあいにははるかに僅かではないが——異なつた季節の労働力需要が非常にげしく変動するものである、というところにある。農業における常雇労働者と季節雇労働者の典型的な区別はそれにもとづいている。以前から前者は主として現物で支払われ、契約で束縛されていて、たいていは地主農場に住んでいる。後者は主

として貨幣で——日給かまたは出来高払いで——支払われ、ふつうは外部から「よそ者」^{フレムト}労働者としてその時々引き入れられたり、また突き放されたりする。非常に粗放な経営においてのみは全収穫労働が自分持ちの労働者の力で、かれらの妻子に加勢させてなしとげられる。この差異を均らすためには、どのような手段も、とくにどのような機械的手段も存在しない。もつとも一般的に使用できる機械、とくに打穀機械こそはかえつてその差異を増大させる。そしてとくにそれはあらゆる経営集約度の増大によって、もつとも多くは釋耕作物栽培によって、非常に著しく拡大される。

経営様式の近代的改革によってひきおこされる労働制度の変化は、いまや労働者階級の全体としての構成にも、それぞれの範疇の類型自体にもかかわってくる。まず常雇労働力の臨時雇労働力にたいする割合が変わり、さらにそれ自体としてみた常雇ならびに臨時雇労働者階級の外観が変わってくる。

標準的な伝統的経営制度によれば、家畜は少なくとも一部分は畑の耕作をも行なうところの独身の僕婢によって世話される。常雇耕作労働者にたいするその他の需要をみたすのはインストロイテである。かれらは刈草と打穀にたいする上述

の分け前権（禾束堆と打穀量で）、固定した菜園地と地主農場栽培区と共に割り替えられる「モルゲン」とから成っている土地割当、ならびに家畜放牧地を賃金として手に入れる。

かれらは主人と個人的な契約関係にあるのではなく、その労働者一家が主人の支配下に隷属しているので、手持ちのいっさいの労働力とともに主人の恣意のままに労働する義務がある。——すなわちすくなくとも二人分の労働力が提供されなければならぬので、成人した子供たちがいないばあいには、インストマンは時として「手伝夫役人」を雇って主人に差し出さねばならない。文書上の契約や仕事を保証させる権利はもともと存在しなかったし、同様に貨幣賃金は収穫期と打穀期以外にだけ、しかも小遣い銭のようにして支払われたにすぎない。したがってそれは、主人がその地主農場住宅でめんどうをみた労働者の家族たちを、形式的にもかれの無制限の処置にゆだねたところの純粹に一方的な従属関係であった。いくつかの州法によればインストロイテにたいして僕婢条令が適用できるので、自由移住権を制限して契約がすむまえに流出したばあいには強制送還さへ行なわれる。——「団結権はまったく存在しない。これが常雇労働力である。これに

反して臨時雇労働力は、インストロイテの妻たちの収穫労働では足りなかつたかぎりでは、近在の農民村落からきちんとした契約もせずに導入されて貨幣賃金で、また以前にはときおり——「刈り手たち」が——出来高分け前でも、使用された。かれらはふつう地主農場には住まず、その法律上の地位は当時すでに工業労働者のそれに近似していた。地主農場におけるその他いっさいの、きわめて多様な範疇の労働者たちは北部諸州では（シュレージエンではずっと早くからすでに違っていたが）、地方的に特殊化されたものであって、変形と結合とによって生じたのであった。

しかし今日ではこの形態の労働制度は衰退しつつある。それは一般に——独特の分け前賃金形態をともなつた——上述の方法では、現物で支払われる労働者にたいしてさへ東部の北半分、つまりプロイセン・ポムメルン・メクレンブルク・北ブランデンブルクおよびポーゼンでのみなお支配しているにすぎず、そこでも後退している。現在の発展のおかげで東部の大規模な地主農場でのいっそうの普及が明らかにもっともめぐまれているところの常雇契約労働者の典型はむしろ「デブタント」である。かれはまる一年間労働する義務を負って

おり、ふつう地主農場に付属する住宅に無料でかまたは安い賃借料で住み、労働日数に応じた日給として、ないしは奴婢給のように固定的な年給として支払われるすこしばかりの現金賃金と並んで、いわゆる「現物給」を、すなわち自身の奴婢に調理して提供される給食の代りに、それに見合った現物を交付してもらうところの労働者である。この現物は、その総額よりすれば一般に労働者自身とその家族との食糧需要をみたすように計算されているが、それに応じて二人目の労働力を提供するというかたちで、ふつうその家族の共働らきがもとめられるのである。

それゆえに狭義のインスト関係にたいするその対照は、前権の廃止と固定した収入によるその置き換えにあり——それは上述の発展の一般的特質に完全に照応する。デブタント関係は古いインスト関係を犠牲にしてと同様に、——たえずより入手困難になりつつある——自身の奴婢の保持を犠牲にしてその地盤を獲得している。

しかし発展は、デブタント関係を乗り越えて、貨幣だけにかまたはほとんどまったく貨幣で支払われる労働者のたえない増加へと向かっている。この世紀のはじめにはかれらは

言うに足るほども存在しなかった。すでに一八四九年に、か

れらもつとも急速に増加していた労働者層であったことはたしかである。それはその後も引き続いてそうであった。より集約的に耕作するばあいの労働力の需要増加分を新しいインストロイテの追加によってみたすことを、土地所有者は避けようと試みた。そうでなければかれは、その土地の収益価値がかれにとつて著しく増大し、七十年代初頭までの農業の繁榮によつて貨幣賃金の支払いがかれにとつて楽になったその時期に、自分の土地の一部分を労働者にあたえねばならなかつたことだろう。さらにまた当今は、進歩した諸要求にふさわしいやり方で労働者の住宅を建てる資本がかれには欠けている。こうして、後に述べらるべき労働需要の変化の諸影響を度外視しても、発展は現物で支払われる労働者の相対的意義の漸次的減退へと向かつたのである。

貨幣による支払いを受け、自分の所有地にかまたは借地人としてかかずれかで定住する労働者との「自由な労働契約」が農村へと侵入した。——その結果を観察しよう。

主として地主農場の現物賃金にもとづいた、既婚のデブタント下僕やデブタント日雇人の関係が大いに実用性をもつて

いるのは、日雇人の個々の世帯からより、多数の労働力が提供されるというところにあつた。かれらはこのやり方で、一方ではいっさいの中間者を抜きにして必需品を調達するために大経営のあらゆる特権を利用して、他方では消費共同体としての家族経済の利点を活かして、可能な限り安価に扶養されるのである。だがしかし現物給与の利点は部分的には、すなわち北部諸州においては、なおそれ以上のものがある。すなわち労働者家族にたいする現物給与の供与は種々の方法で行なわれる。シュレージエンの諸地方では、デプタート下僕は週または月ぎめで肉・馬鈴薯・パン・塩・牛乳および亜麻布の固定した収入を受け取る。——それゆえかれらはここではその必需品を、もしそう表現してよければ、完成品ないしは半製品の状態で、つまり完全にかまたはほぼ完全に消費するばかりになつている生産物として手に入れる。それらにたいするかれら自身の態度はほとんどただ消費的なものであつて、単なる奴婢の給食との相違は大きくはない。その理由は、シュレージエンでは土地集中の傾向が以前の不自由な農奴^{ウツタート}の自己経営を完全に吸収したかまたは成長させなかつたという点にある。北部諸州ではそれはふつうちがっている。現物

給としては穀物は挽かれも焼かれもせずにあたえられる、馬鈴薯はたいがい一部分だけしかあたえられず、他の部分はデプタート自身が栽培するが、このために割り当てられた土地を受け取る。部分的にはかれには種穀も提供される、ふつうかれはこれを自分で貯蔵し、肥料も自分でつくらなければならぬ。亜麻についても同様である。まだ古い諸関係が続いているところでは、かれはそれを自分で播き、自分で收穫する。さらにかれは、そのためにかれに放牧地が提供されているところの自分の羊から羊毛を手に入れ、主家によつてかれのために放牧され、飼養されているところの自分の牝牛から牛乳とバターを手に入れ、かれがその現物で飼育する自分の豚から肉を手に入れる。紡糸と織物は家族が冬期に自分でつくり出す。いいかえれば、そこではかれの必需品を生産する過程の基本的部分さえも主人からかれに転嫁されており、かれの自由な時間、すなわち仕事をすませてからの時間・自由な日曜日および仕事のひまな冬期が利用され、また一緒に働らきに出でないかれの家族員までも利用し尽される。このようにして労働者の家族さえ労働力の再生産のために不可欠なものをつくり出すために使用され、それによつて家族経済

の経済的利点はたんに消費共同体としてだけでなく生産共同体としても主人の利益のために利用される。われわれが問題の社会的側面を度外視して、さしあたりただ経済性の原則、すなわち労働力の最小限の扶養費と再生産費が、そこにたいしてここではどうなっているかということだけを問題にするならば、その答えは主人にとつては明らかにシュレージエンにおけるよりも間違いなく有利なものである。シュレージエンと同等の食糧状態を達成するためには、かれはここではずっと小さな犠牲を払うだけでよい、その理由はかれは（住居以外）ほぼ独占的に原料品と自然力とを自由にすることができ、飲食用の必要品をそれから生産し、加工することは労働者に転嫁するからである。⁽¹⁾

(1) 家内紡織の一見時代錯誤的な生産形態でさえもここでは経済性の原則にまざっている。それに使用された労働力はなるほどつくり出された衣類の生産に「社会的に必要な労働力」をはるかに越えているけれども、しかしそうでなければその労働力はその冬中まったく利用されずにいなければならない。

あるいは逆にいって、主人は同じだけかまたはより少ない支出によって、労働者家族に相対的にはずっと高い食糧状態を

可能ならしめる。かれはそのばあいたしかにかれらの労働力を一般に考えうるぎりぎりまで緊張させる。そしてもちろんこうしたことはその他の事情がひどい、かぎりシュレージエンでは同じようには起らない。しかしシュレージエンのポーランド人労働者階級の奴隷のような文化水準のばあいにはこのことはおそらくその文化水準の向上をまねかずに、あきらかにただここで必然的な純消費的家族経済においては地主農場生産にたいするかれ自身の関心を沈滞させる結果にしかなっていない。

もちろん北東部の地主農場労働者の状態がシュレージエンのそれと比べてこうしたちがった形態をとるのはたぶんこのように経済性を考慮することから生じたのではない。その相違はむしろ歴史的な理由によるものである。

シュレージエンのデブタート下僕はその起源をかくしてはいない。かれはわずかばかり手直しされた家内奴婢の地位にある。かれの家計は地主農場の家計からほとんど目立たぬくらいしか分離されていない、かれの地位は賄いを受ける下僕のそれにきわめて類似している。それはまたつぎのこと、すなわちデブタート下僕とかれの妻とがたいいそれぞれ別々

の契約を結び、二人の賃金と現物とはおのおの別々ではあるが、それにもかかわらず夫婦ひとまとめにした収入が子供の労働者世帯のそこでのふつうの収入を相補ってみたすようにきめられていることにもあらわれている。シュレージエンのデブタントは主人の家計からの家内奴婢の始まりつつある解放の産物である。

北部ではそうではない。常雇契約労働者のふつうの賃金形態としてのデブタント関係はここでは一般にやっとな部分的に確実な地歩を占めたが、それはまだ一般的にはなっていない。他方では、いまその関係にとって有利な労働制度の発展が今後それをのりこえて純貨幣経済的な賃金形態へと向うだろうということ、大いにありそうなことである。北部のデブタントは歴史的にはけっして地主農場の台所から徐々に解放されつつある下僕ではない。その給与支払い形態はたしかに地主農場使用人から引き継がれている。すなわち管理人・会計係・下僕長等々は昔からこうした方法で給付された。だがしかしデブタントの大多数はその背後にもうひとつ別の歴史をもっている、すなわち北部におけるこれらの歴史上の祖先は夫役義務を負った自営者^{インデペンデント}であった。近代のデブタント

は、近代の農業大経営の、とおく始源にまでさかのぼりうるひとつの発展の、（一時的な）区切り立っているにすぎない。その発展は、領主^{ズント}に労働が提供されるのではなくて、かれの家計の支出のために現物が引き渡された状態（もちろん地方的にしか指摘できないが）とともに進む。領主^{ズント}の家計はグルントヘルシャフトには適していたが、グーツウルトシャフトはそうではない。主人はその政治的支配権によって、ひとは王室費だと言うこともできようが、かれの生計費を従属経営から手に入れたのである。つまり主人ではなくて、これらのものだけが農業生産者であった。イギリスにおいてはわが国のばあいと同様にこうした状態に家父長的協同経営の周知のタイプをなすところの別種の状態が続いた。すなわち主人と隷農^{ヒンダーツ}の両者が経営し、同時に農民の従属経営がグーツウルトシャフトにたいして労働力を提供するものである。イギリスではこれはひとつの間奏曲にとどまった。つまり領主^{ズント}はその発展の途中で、貢納義務を負うけれども自立的な小生産者としての隷農の利用にもういちどたちかえった。ただかれはいまや現物のかわりに貨幣地代を受け取っただけのことである。これに反してドイツの東部では貨幣経

済的發展がおくれた結果自然経済的企業家たる領主レントホフの地位は隷農を犠牲にしてさらに高まった、そしてその地積の一部でもって調整レグジュリヤの機会にむりやりの抱き込みから解放されることができたのは隷農のごく一部分にすぎなかった。その他の点では以前の状態が復帰して、グーツヘルが唯一の企業家になった。地主農場の生産物から固定した現物給を受けとるものは、かつてのようにグーツヘルではなく、いまや隷農である。

この發展は、さきに述べたように北部では現在まで完成されていらない、しかもそれは主としてグーツヘルの経済的脆弱さのおかげである。すなわち調整にかかった農民から農民としての生存をまもつたのは、何といつてもグーツヘルの側での経営資本の不足であった。そうではなくて、もしグーツヘルがもっと大きな面積を経営するための資本を持っていたとすれば、農民経営のはるかに大きな部分は買い集められて即座に消滅したことであろう。経営資本が不足して、そのために現金で貸金を支払えないことが、まったく同様に調整から除外されて次第に所有権を奪われた小農民と農業労働者の完全なプロレタリア化をさまたげた。グーツヘルはその経済的

脆弱さのために自然経済的にしか貸金を支払えなかったため、収益分け前、土地分与ならびに放牧権の形態での貸金支払いを存続させねばならなかった。それによってさしあたり東部における数十万の独特のあいの子的な小経営——(デプタントを除く狭義の)インスト経営——が命をつないだ。——土地を分与され、収益に参与するこの労働者の、半ばは小企業家としての、半ばは主人の経済への参加者としてのその独特の二重の地位は、すでに上で詳論された。主人の処置に完全に服従することが、経済的利益協同体と結びついている

ことは、その関係にとって特徴的なものである。土地の価値が増大してより集約的な経営へと移行するばあいに以前からのインスト関係と並行したりまたそれに取って代つたりするのをつねとするところのデプタント関係は、その土地の一部を没収し、粗収益にたいする分け前を固定した現物給に置きかえるというかたちで、これまで労働者にふりかかった危険を制限しているもので、その限りではたしかに地位の改善を含んでいる。同時にそれはかれの家計を主人の経済への組み入れから引きはなし、それによってかれをより高度に自立させる。インストマンの小企業家的地位のそれ以上のあらゆる制

限と貨幣賃金の相対的意義のあらゆる増大とは同じ意味で作用し、それゆえに以前からのインストマンの絶対的服従にくらべれば労働者の地位の改善とみて差しつかえない。小企業家的地位のこうした後退はデプタントの下でも止まることがない。伝統的現物給与の強みの本質的要因は——われわれが見たように——ひとつひとつの世帯がその地主農場にそれ以上の労働力を、すなわちインストマンあるいはデプタントと並んで手伝夫役人を提供したことであった。労働者はより多数の労働力をこうして提供することがいっそうむずかしくなる。自分の子供たちはおそくとも兵役のちにはいなくなる、そしてきわめて悪評高いろくでなしでもなければこんにちではもはやだれ一人としてたやすくは手伝夫役人——つまり最低位の農業奴婢——としてインストマンに雇われはしない。手伝夫役人関係の日数が算入されていることは確かである。しかしそのばあいグーツヘルにとって現物給与の利点は失なわれる。一家族の入用のために計算されていた現物を、かれはその半分の労働給付にたいして与えることはできず、しかもそれが減らされれば、それは労働者の家族を扶養するためにはもはや十分ではないことになる。こうして双方

が貨幣賃金に押しやられる。いかにも貨幣賃金は労働者が自分のもらうものが何であるかを知っているという長所を、見たところもつとも無条件にそなえている。現物給与のばあいにいちばん問題であるところのグーツヘルの給付の価値は、貨幣賃金のばあいには法律的に保証されている。

しかし法律的・形式的な確定がつねに労働者階級の状態にひとつの改善をもたらすとは限らない。シュレージエンにおいてその発展がたどってきた道は、そのことをはっきりと示している。

すなわちシュレージエンにおいては——とくに中および下シュレージエンが問題であるが——農場経営の仕方は北部におけるよりも早くから營業的¹資本家的性格を帯びていた、同時に地主農場にたいする労働者の関係は法形式的には北部におけるよりも高度に確立されていた。われわれはここではまだこの世紀の前半には打穀ゲルトナー²の中にその経済的地位がインストロイテのそれに完全に照応するところの労働者の一範疇をみいだす。かれらの状態の相違は二重のものであった。たしかにかれらには（上シュレージエンの「夫役ゲルトナー」とは対照的に）世襲的占有権が認められ、相互のあ

いだの権利と義務とは物上負担として取り扱われた、それゆえに打穀ゲルトナーにたいする主人の処置には法律的制限が加えられた。しかし他方では非常に富裕なシュレージエンの大貴族の経済的優位は北部のグーツヘルのそれとはくらべものにならないほど大きいものであった。両者が結びついたことは労働者には不運であった。打穀ゲルトナー関係はインスト関係ほど弾力的ではなかった、そしてそのためにより広範でより合理的に主人が自己経営を行なうという意図をもったグーツウィルトシャフトの改革が、それを打ち砕いた。グーツヘルは労働義務の償却をあえてしたが、しかしまた分け前権の償却をも強制したのであった。そして打穀ゲルトナーは、もはや地主農場での労働を義務づけられてはいないが、しかしもはや分け前にあずかる権利もなく、ただそのさい依然として地主農場での仕事には依存しつづけたところの、形式的には自由な小地片所有者になった。グーツヘルはその労働力需要の増大をみたすのに、以前からの打穀ゲルトナーと並んで新しく建てた家族用家屋に零細な土地割り当てをもったいわゆる「貸金ゲルトナー」を住まわせることによつてした。つまりインストロイテにたいするひとつの相似現象である。

企業家のいっそう大きな資本力に照応して、以前からの打穀ゲルトナーの労働関係も貸金ゲルトナーのそれも貨幣経済の基礎の上に規定された。小地片所有者は最初からほとんど貨幣資金だけを受け取った。また貸金ゲルトナーはそれと並んで土地と放牧地とを受け取ったが、両方とも北部のインストマンとは比べものにならないほど狭い範囲のものでしかなかった。ところで、小地片所有者が償却後の時期に貨幣資金として得たものは、インストマンがかれの現物と並んで得たよりもまたいして多くはなかったということ、またかれは今日でもまったく同様にふつう貨幣資金としては貸金ゲルトナーあるいはその他の無所有の労働者がかれらにあたえられた住居や土地割り当てと並んで、手に入れるものと同じだけのものを得ているにすぎないということは、伝統的な農業の賃金形成にとつて特徴的なことである。このためにグーツヘルは、かれらが無所有の労働者に住居と土地を「無償で」あたえてやったのだという観念におちいりがちである。歴史的・経済的にはその逆の言い回し、つまりグーツヘルは、かれらが小地片所有者にあたえたのではなくて、小地片所有者が自分で所有している地積や住居を、かれの労賃に算入するのだ、という

ことだけが正しい。またそれは土地所有者がその賃金問題をつねづねどう見ているかに実際に相応している。もしひとつが、村落から来る土地持ち労働者の使用が同様にしばしば見出されるどころ、たとえばザクセン出身の土地所有者と議論して、そこでは以前からふつうに行なわれている一マルクの賃率を批判したとすれば、当事者たちはいつでも、労働者は自分の所有地を持っているのだから、かれらの生計をまかなうためにはこの賃金だけを頼りにしてはいない、ということをはめめかす。すなわち伝統的な経済的諸関係の圧倒的威力を前にしては、法の形式はどんなに無力なものであるかがわかる。農村においては賃金の尺度は労働給付ではなくて、かれらの伝統的生活基準に応じた労働者の欲望の最小限である。このことはその他の純粹の賃金労働者にあてはまるのと同様にデブタントにもあてはまる。すなわちあたえられる現物給の高さは個々の地方で非常に大きな相違があり、もっぱら歴史的に受け継がれながらすこしずつこの基礎の上に発展し続けている食糧状態に順応する、このものが賃金を規定するのであってその逆ではない。これにたいして労働者の立場からすれば、主人がそのインストロイテを純粹の賃金労働者としてで、

なく、その隷屬的な経営仲間として取り扱うことをともなう北部の家父長的労働制度の重要な長所は、主人の形式的には無限の処分権にもかかわらず、いなそれゆえにといえるだろうが、労働者の伝統的な収入権が強固だったので、粗収入がだんだん増加するにつれてかれらの物質的狀態が、その食糧狀態に關しては、たえず高まったということであった。非常に微弱にだが同じことはデブタート給与の随伴現象でもありうる。貨幣賃金制度のばあいにはまったく事情が異なる。インストロイテの、またより小規模にはデブタントの現物賃金は、これにみあった危険の一部と上述のような生産過程の一部を労働者へ転嫁したうえで、増加しつつある粗収益から支払われる。貨幣賃金は同等の転移ができずに減少する純収益から支払われる。それは上に詳論した純経済的利点をなくしてしまふことになる。労働者の一部が土地持ちであるという事情は、そのばあいほとんどもっぱら不利に作用する。というのはかれらの土地しがみつiky賃金測定にたいするいま述べたばかりの作用は賃金水準一般を圧迫するからである。小地片所有者は地主農場の経済協同体から閉め出された。かれは穀物を販売するインストマンのように、グーツヘルとの利^{デブタート}益

協同^{マインシャフト}体の状態にあるのではなく、パンを買い足すので利害対立の状態にある。しかし、企業家と労働者との間の勢力関係が農村におけるように労働者にとって不利なものであるところでは、その経済的勢力状態をとうてい変更できないところの形式的な法律的制限が労働者の農地に所有権を賦与するという形態で設けられることは、農村の物質的・利益に一致しない。主人の完全な、形式的な処分権を前提とする家父長的支配関係はそれによって一個の營業的支配関係に変質させられる。それとともに労働者にたいしては、かれが移住によって免かれることのできる野蛮な人格的支配のきまぐれにかわって、營業的搾取という別の支配がもたらされる。その搾取は外見上ずっと目立たずに入り込むので、労働者は事実上それからのがれることがよりむずかしく、小所有者としてもけつしてのがれることができない。農村にひろく分散して組織できない労働者階級がたたき抜くだけの力を持っていないところの利害闘争へと、労働者はその形式的な法律的対等の地位によって、強いられるのである。

もしここで伝統的インスト関係が「家父長的」関係として特色づけられ、主人と労働者との「利益協同体」がその関

係に特徴的なものであると主張されてきたとすれば、この表現はどうせん、それによって主人と労働者との間のなんらかの人格的信頼関係がこの労働制度の必然的帰結であると主張されてよいかのような誤解を受けるべきではなかった。主張されてよいことは、この労働制度が主人と労働者にとり強固な協同体的利益の絆をからませており、その主人による経営協同体の家父長的指導はこの事情に適しているが、同様にそれは、物質的利益の絆が欠けているために貨幣賃金制度とは矛盾している、ということだけである。家父長的労働制度は、

農村においては労働者は主人にたいして契約関係にあるのではなくて、人格的従属関係にあるということ卒直に表現している、そしてこの卒直さがその労働制度の強みである。しかしそれだからこそ、その労働制度は東部のインストロイテがそれを代表したところの、あの忍従的な・隷属の伝統に呪縛された労働者人口を前提としており、そしてこの前提はますますつき崩される。企業家だけでなく労働者もまたまったく同様に、インスト関係の代りにデブタント関係を、現物賃金の代りに貨幣賃金を、契約の代りに法的不拘束を好むのであって、いまやそのことは一般的にいて十分に保証されて

いるようにみえる。しかしそれがどうであろうと、とにかくこの変化とともに家父長的支配の不可欠の前提、すなわちひとつ、ひとつの地主農場にたいするその利害関係は崩壊する。

個々の範疇の労働者の地位における相違が均らされる、そして企業家という人間は、工業労働者にとってはふつうすでにそうであるように、農業労働者にとって「代替できる」ものになる。いいかえれば、発展は、工業労働者階級がすでにそうであるように、その基本的な生活諸条件において一個のプロレタリア型の単一階級的な性格をもった農業労働者階級へとたえず接近してゆく。資本家的企業はさきに表示された理由からその経済的利点にもかかわらず、現物賃金制度から抜け出さうと努力する、——労働者は、経済的にはそのばあいずっと損であるにもかかわらず、それがかれを主人の経済と善意への依存からいちばんよく解放するために、貨幣賃金を求める。中世において農民の貨幣賃租ゲルトツェンがかれの人格的自由の最も重要な徴候として現われるのと同様に、こんにちでは労働者の貨幣賃金もそうである。農業労働者階級は、物質的にはしばしばずっと有利だが、しかしより安泰であっても従属的なかれらの状態を、人格的自由を得ようとする努力のために犠牲に

する。その経過におけるこの決定的な心理的側面が関係者たちにはほんらい意識されずに生じるということは、その作用の重みを増すばかりである。しかし、工業労働者と同様に自立的企業家層へと上昇できる展望をふつうほとんど持っていない一個の労働者階級にとっては、この変化は階級闘争のための準備段階としての意味をもつにすぎない。すでに示されたように、グーツヘルもまた営業的企業家タイプをもった本来たがい同質の一階級へと転化しはじめた。ここでも近代的発展は人格的支配関係にかえるにその心理的帰結である非人格的階級支配をもつてする。

さて問題は、それからさきどうなるだろうかということである。闘争は工業におけると同様の経過をたどるのであるか。時がたつにつれて労働者が組織される道で、そこから農村労働者貴族階級が発生することがありうるだろうか、ちようど、完全なプロレタリア化こそが労働者階級の最上層の向上運動のための経過点となったところの、イギリスの多数の大工業においてわれわれが見るように。

残念ながら農村の階級闘争の予測は、そのようにめぐまれてはいない。